

<abstract>

A Corpus-Based Study on the Characteristics of the KILL-DIE Event Expressed in Thai

Kiyoko TAKAHASHI

Kanda University of International Studies

Within the framework of Discourse Analysis (Hopper 1991), this paper aims to characterize the KILL-DIE Events in Thai. In particular, it attempts to clarify the characteristics of the KILL-DIE Event by comparing the KILL-DIE Event and the KILL and DIE Events.

I have examined the syntactic forms and discourse-level semantics of (a) *khâa* ‘kill’ expressions, (b) *taay* ‘die’ expressions, and (c) *khâa-taay* ‘kill-die’ expressions, which were gathered from discourse data of the Thai National Corpus (TNC), and found the following. The KILL-DIE Event has some unique characteristics that are distinct from the characteristics of the KILL Event and the DIE Event in terms of the scope of description and the part of specific foregrounding within the description scope. Their characteristics are as follows:

- (a) The KILL-DIE Event and the KILL Event are different from the DIE Event in the scope of description: the description of the former causative Events includes all the three sub-events in the event ICM, ‘Cause (= killing) + Change (= becoming dead) + State (= being dead)’, while that of the latter non-causative Event excludes the first sub-event ‘Cause’.
- (b) The KILL-DIE Event is different from the KILL Event and the DIE Event in the part of specific foregrounding: the KILL Event has only the first sub-event ‘Cause’ specifically foregrounded; the DIE Event has the second and third sub-events ‘Change + State’ specifically foregrounded; and, the KILL-DIE Event has either the second and third sub-events ‘Change + State’ or all the three sub-events ‘Cause + Change + State’ specifically foregrounded.

This corpus-based study has revealed that Thai speakers use *khâa-taay* ‘kill-die’ expressions to give attention to both an effector (A)’s causative process (i.e. A’s killing) and an animate patient (B)’s resultant state (i.e. B’s becoming dead) in the passive situation of the KILL-DIE Event (i.e. B undergoes such a change of state that A kills B and B dies) rather than to focus on only the patient’s resultant state in the active situation (i.e. A kills B and B does or does not die).

タイ語コーパス TNC を利用した談話分析に基づく *khâa-taay* (殺す-死ぬ) 事象の考察

高橋清子

神田外語大学 kiyoko@kanda.kuis.ac.jp

1. はじめに

タイ語では、他動詞 *khâa* ‘殺す’ と自動詞 *taay* ‘死ぬ’ は、(1)のようにそれぞれが節の構成素となって接続形式を介して結びつくことがある他、(2)のようにそれぞれが動詞句の構成素となって接続詞を介さずに直接結びつくこともある。

- (1) *maanóp* *khâa* *yák* *lé?* *yák* *taay*
 マーノップ (人名) 殺す 鬼 そして 鬼 死ぬ
 マーノップは鬼を殺す, そして, 鬼は死ぬ
- (2) *mûa* *maanóp* *khâa* *yák* *taay* *léew* ...
 ~とき マーノップ (人名) 殺す 鬼 死ぬ 完了
 マーノップが鬼を殺して (鬼が) 死んだとき, ... [ACHM001]¹

(1)では、2つの節—「*maanóp khâa yák* ‘マーノップが鬼を殺す」と「*yák taay* ‘鬼が死ぬ’—が等位接続詞「*lé?* ‘そして’」によって結びつけられており、それぞれの節が表す事象はお互い独立した事象である。一方(2)では、2つの動詞句—「(*maanóp khâa yák* ‘(マーノップが) 鬼を殺す」と「(*yák taay* ‘(鬼が) 死ぬ’—が項名詞句「*yák* ‘鬼’」(*khâa* ‘殺す’の目的語かつ *taay* ‘死ぬ’の主語)を介して結びつき、複雑な構造を持った1つの節(動詞句連続構文)が形成されている。そうした複雑な構造を持った1つの節は複雑な構造を持った1つの事象を表現する。(2)の話者の心の中では、密接に関連する2つの副事象(殺す事象と死ぬ事象)がいわば融合し、まとまりのある1つの事象が成立していると言ってよい。(2)のような動詞句連続構文(以下「*khâa-taay* 構文」と呼ぶ)は、語彙的意味論の観点からは、冗長あるいは非論理的な表現であると見なされる。例えば Talmy (2000b: 267-268)は、(2)に似た英語表現 ‘I drowned him *dead/to death.’ が成立しない理由について次のように述べている。*drown* ‘溺死させる’の語義には、単に動作主の行為だけではなく、その行為の結果、行為の受け手が死ぬという動作主が意図した目的事象が実現すること(attained-fulfillment)までが含まれている。したがって *drown* の後ろに死んだ状態や死への移行を意味する *dead* や *to death* を付け加えると冗長な(pleonastic)表現になってしまう。*khâa-taay* 構文については先行研究で様々に論じられているが、その多くは Talmy (2000b)に代表される語彙的意味論の見地に立った研究である(第3節)。本稿では、言語形式で表される「事象」という概念を典型的には談話レベルの概念と捉える Hopper (1991)の考えに従い、² 談話分析によって、*khâa-taay* 構文が表す事象概念(以下「*khâa-taay* 事象」と呼ぶ)の特徴は何か、*khâa-taay* 事象は *khâa* ‘殺す’ 動詞句だけを含む節で表される事象(以下「*khâa* 事象」と呼ぶ)および *taay* ‘死ぬ’ 動詞句だけを含む節で表される事象(以下「*taay* 事象」と呼ぶ)とどのように違うのか、という点を追求する。具体的には、タイ語の大規模電子コーパス Thai National Corpus (TNC)から収集した談話データに基づき、*khâa-taay* 構文の統語的振舞いや節構造について調査し、さらに「意味フレーム(frame)」(Fillmore 1982)の一種である「因果連鎖(causal chain)」(Croft 1991)あるいは「事象の理想的概念構造(event ICM)」(Croft 1996)という分析概念と、認知プロセスの一種である「プロファイル(profile)」(Langacker 1987)あるいは「注目枠(windowing of attention)」(Talmy 2000a)という分析概念を援用し、*khâa-taay* 事象の特徴を探っていく。本稿の構成は以下のとおりである。まずタイ語の動詞句連続構文全般を説明する(第2節)。次に *khâa-taay* 構文に関する先行研究の見解を紹介し(第3節)、TNC を使った談話分析の結果を報告する(第4節)。最後に本稿の考察結果をまとめる(第5節)。

2. タイ語の動詞句連続構文

タイ語ではなぜ複数の動詞句が連続し得るのか。以下のようなタイ語の言語特徴が動詞句連続構文を可能にしている。第一に、タイ語は声調言語であり、声調による音節の種類の豊富さから、基本語彙は動詞も名詞も単音節語が多い。複数の動詞句をつなげて発音することが比較的容易である。第二に、タイ語は典型的な孤立語であり、屈折や派生などの語形変化がない。定動詞/不定動詞の区別がなく、文法範疇概念の特定化も必須ではない。複数の動詞句を使って1つの節を構成するときに複雑な形態的、統語的操作を必要としない。第三に、基本語順は「主語、動詞、目的語」の順番だが、動詞には必須項がなく、項と非項の区別も明確ではない。動詞句の形にとらわれずに動詞句をつなげやすい。

- (3) *lom* *phát* *mùak* *pliw* *lon* *nám* *pav*
 風 吹く 帽子 ひらひら飛ぶ 下る 水 行く
 風は帽子に吹き (帽子が) 飛んで水に沈んで行った [NACHM053]

- (4) mɔŋ hɛ̃n bāan ŋɔŋlúk
見る 見える ンゴールック村
(高い山の上にある村から) 見てンゴールック村が見える [NACHM053]

(3), (4)は動詞句連続構文の具体例である。動詞句連続構文で表される事象は、文化的に容認でき、想起が容易な、まとまりのある 1 つの事象とみなせる事象である。1 つ 1 つの動詞句が表す事象は、お互い経験的に結びついた事象として捉えられ、その結びつきは文化的に重要な結びつきであると認められる(Bruce 1988, Durie 1997, Enfield 2002)。例えば(3)では、使役動詞 *phát* ‘吹きつける’, 様態動詞 *pliw* ‘ひらひら飛ぶ’, 経路動詞 *loŋ* ‘下りる’, 直示動詞 *pay* ‘行く’ という 4 つの移動動詞が共起し、まとまりのある 1 つの移動事象を表現している。(4)では、*mɔŋ* ‘見る’ と *hɛ̃n* ‘見える’ という 2 つの視覚動詞が共起し、まとまりのある 1 つの視覚事象を表現している。

2 つの動詞句から成るタイ語の基本的な動詞句連続構文が表す事象の種類は、(5)-(8)に例を挙げたように、大きく 4 つに分類できる(Takahashi 2009)。³

- (5) a. *tòk tèek* ‘落ちて壊れる’ 「現実事態: *tòk* ‘落ちる’ → 現実事態: *tèek* ‘壊れる’」
 b. *cháy mòt* ‘使って尽きる’ 「現実事態: *cháy* ‘使う’ → 現実事態: *mòt* ‘尽きる’」
(6) a. *lăy maa* ‘流れて来る’ 「現実事態: *lăy* ‘流れる’ = 現実事態: *maa* ‘来る’」
 b. *nɔŋ ?àan* ‘寝て読む’ 「現実事態: *nɔŋ* ‘寝る’ = 現実事態: *?àan* ‘読む’」
(7) a. *pay súuu* ‘買うために行く (行って買う)’ 「現実事態: *pay* ‘行く’ → 非現実事態: *súuu* ‘買う’」
 b. *yâaŋ kin* ‘食べるために焼く (焼いて食べる)’ 「現実事態: *yâaŋ* ‘焼く’ → 非現実事態: *kin* ‘食べる’」
(8) a. *yàak pay* ‘行くことを欲する (行きたい)’ 「現実事態: *yàak* ‘欲する’ = 非現実事態: *pay* ‘行く’」
 b. *sǒn cay rian* ‘学ぶことに関心がある’ 「現実事態: *sǒn cay* ‘関心がある’ = 非現実事態: *rian* ‘学ぶ’」

(5a)「落ちて壊れる」と(6a)「流れて来る」では、先行動詞句(落ちる, 流れる)と後続動詞句(壊れる, 来る)のどちらも現実事態を表しているが、(7a)「買うために行く (行って買う)」と(8a)「食べることを欲する (食べたい)」では、先行動詞句(行く, 欲する)だけが現実事態を表し、後続動詞句(買う, 食べる)は目的事象や願望事象といった非現実事態を表している。また、(5a)「落ちて壊れる」と(7a)「買うために行く (行って買う)」では、先行動詞句が表す事態(落ちる, 行く)と後続動詞句が表す事態(壊れる, 買う)は継起的(→)であるが、(6a)「流れて来る」と(8a)「食べることを欲する (食べたい)」では、先行動詞句が表す事態(流れる, 欲する)と後続動詞句が表す事態(来る, 食べる)は同時的(=)である。本稿で考察する「殺して死ぬ」という動詞句連続構文は、(5)「落ちて壊れる, 使って尽きる」と同じ種類に属する。すなわち、先行動詞句(落ちる, 使う, 殺す)が現実の原因事象を表し、後続動詞句(壊れる, 尽きる, 死ぬ)が現実の結果事象を表している。

原因事象と結果事象は、先に述べたとおり、お互い経験的に結びついた事象でなければならない。(9)「殺して死ぬ」は容認されるが、(10)「殺して傷つく」は容認されない(Thepkanjana 2008)。なぜなら「殺す」事象と「傷つく」事象は経験的に結びついている事象同士とは言えないからである。

- (9) *khâa taay* ‘殺して死ぬ’ 「*khâa* ‘殺す’ → *taay* ‘死ぬ’」
(10) **khâa cèp* ‘殺して傷つく’ 「*khâa* ‘殺す’ → ? *cèp* ‘傷つく’」

3. *khâa-taay* 構文に関する先行研究

- (11) *múua* *maanóp* *khâa* *yák* *taay* *léew* ...
 ~とき マーノップ (人名) 殺す 鬼 死ぬ 完了
 マーノップが鬼を殺して (鬼が) 死んだとき, ... [ACHM001]
(12) *múua* *maanóp* *khâa* *yák* *léew* ...
 ~とき マーノップ (人名) 殺す 鬼 完了
 マーノップが鬼を殺したとき, ...
(13) *múua* *yák* *taay* *léew* ...
 ~とき 鬼 死ぬ 完了
 鬼が死んだとき, ...

(11)=(2), (12), (13)に挙げた対照例を見てほしい。(11)は *khâa* ‘殺す’ 動詞句と *taay* ‘死ぬ’ 動詞句が結びついた *khâa-taay*

構文, (12)は *khâa* ‘殺す’ 動詞句単独から成る *khâa* 構文, (13)は *taay* ‘死ぬ’ 動詞句単独から成る *taay* 構文である。どれも単一の節を成し, まとまりのある 1 つの事象を表している。しかしながら(11)の *khâa-taay* 構文は, (12)の *khâa* 構文や(13)の *taay* 構文に比べ, 冗長に感じられるかもしれない。第 1 節で言及した Talmy (2000b)の見解では, 「殺す」と言うからには「死ぬ」という事態が起こっているはずだ, 言い換えれば, 「殺す」には「死ぬ」が含意されているはずだ, だからわざわざ「死ぬ」と明示的に表現する必要はない, ということになる。このように一見冗長な *khâa-taay* 構文がなぜ存在するのか, *khâa-taay* 構文の意味機能は何か, という問題についてタイ語研究者の意見は一致していない。例えば, 坂本(1985: 186)は, *khâa* ‘殺す’ のようなタイ語の他動詞は「基本的には対象に対する働きかけしか表し得ず, 動作結果を含意しない衝撃や圧力を加える行為を表す動詞と同じ意味範囲を持つ」とし, 「自動詞 *taay* (死ぬ) の他動的表現は, 厳密には他動詞 *khâa* (殺す) ではなく, *khâa-taay* である」と述べる。⁴ 峰岸(2007: 214)は *khâa mây taay* ‘殺して死なない’ という否定形に言及し, このような構文においては「動作の企てだけが含意され, 動作の目標とした結果の成立が打ち消される」という見解を示している。そして, 先行動詞句で表される「する」類の行為の結果, 後続動詞句で表される「なる」類の結果が成就する, といった因果関係を表す動詞句連続構文においては, 他動性の高い動詞「殺す」が使われようとも「死ぬ」という結果は含意されない, と説明する。すなわち, *khâa-taay* ‘殺して死ぬ’ という動詞句連続構文の構成素としての *khâa* ‘殺す’ の意味は「対象に対する働きかけしか表し得ず, 動作結果を含意しない」という坂本(1985)が説明した意味に合致することになる。Noss (1964: 125-132)のタイ語文法の記述では, 「殺す, 見る, 聞く, 探す」などの行為動詞に続く「死ぬ, 見える, 聞こえる, 見つかる」などの動詞は「試みた行為の成就 (successful completion of attempted action)」を意味する「完了動詞(completive verbs)」として分類され, そうした完了動詞と共に起る行為動詞は「試みの行為 (attempted action)」を意味するとされる。上原・Thepkanjana (2009)は, 峰岸(2007)が「「する」類と「なる」類の動詞の組み合わせ」と定義し, Noss (1964)が「試みの行為+その行為の完了」と特徴付けた動詞句連続構文(他動性の高い行為事象を表す他動詞と他動性の低い結果事象を表す自動詞が組み合わせられた構文)をタイ語における「結果構文」とみなし, Talmy (2000)が分類した結果構文の 4 つのタイプ「①実現内在(intrinsic-fulfillment)動詞+他事象(further-event)助辞」(e.g. ‘I kicked the hubcap flat.’), 「②実現未定(moot-fulfillment)動詞+実現(fulfillment)助辞」(e.g. ‘The police hunted the fugitive down.’), 「③実現示唆(結果示唆) (implied-fulfillment)動詞+実現確定(confirmation)助辞」(e.g. ‘I washed the shirt clean.’), 「④実現完了(結果含意) (attained-fulfillment)動詞+冗語(pleonastic)助辞」(e.g. ‘I drowned him *dead/to death.’)—の中の③と④を取り上げ,⁵ 英語の結果構文との異同を考察している。⁶ 上原・Thepkanjana (2009: 397)は, *khâa* ‘殺す’ のような結果含意動詞が結果構文の主動詞の位置に現れるときには, 結果構文という構文が *khâa* ‘殺す’ という語彙の「元々の意味構造(語彙アスペクト構造)の捉え直しを強制する」と説明する。結果構文に組み込まれることによって, 本来は結果含意動詞である *khâa* ‘殺す’ の語彙アスペクトのプロファイル・シフトが起こり, 結果含意動詞から結果示唆動詞へ転換するのだという。つまり, 本来 *khâa* ‘殺す’ は「死ぬ」という結果事象の実現を意味する(限界性を持つ)達成相動詞であるはずだが, 結果構文の構成素として使われるときは「死ぬ」という結果を単に示唆するだけの(限界性を持たない)活動相動詞として解釈される, という考え方である。このように峰岸(2007)と上原・Thepkanjana (2009)は, *khâa* ‘殺す’ の語彙の意味を問題とし, どのような構文に生起するのかによってその解釈が変わる, つまり構文の意味に合致するように動詞 *khâa* ‘殺す’ の語彙の意味の捉え直しが起こる, と主張している。

一方, 高橋(2010: 95, 115-116)は別の見方を提示している。上述の先行研究が分析対象とした行為事象を表す他動詞と結果事象を表す自動詞が組み合わせられた「殺して死ぬ, 破って裂ける, 洗ってきれいになる」などのタイ語の構文は, 直接的因果関係を表す(5)タイプの動詞句連続構文の 1 下位分類に過ぎないと指摘し, 次のように主張した。タイ語では「殺して死ぬ」といった他動性の高い形式も, 「落ちて壊れる」といった他動性の低い形式も, どちらも同じ(5)タイプの因果動詞句連続構文に分類できる。⁷ なぜならどちらの形式もその基本的意味機能は同じで統語的振舞いも基本的に変わらないからである(Takahashi 2009)。(5)タイプの因果動詞句連続構文を使う人の関心は「原因事象の生起を前提として, どのような結果事象が生起するのか」という点にある。因果動詞句連続構文が表す意味の核心は「当該の語用論的, 物理的, 社会的, 文化的文脈の中での自然の帰結」という話者の解釈である。言い換えれば, ある出来事を「何かを背景とした合理的な帰結」と捉えたとき, タイ語話者は因果動詞句連続構文を使ってその出来事を表現するのである。「殺して死ぬ/死なない」であれば, 当該文脈の中で殺すという行為事象の生起を背景として(その自然の帰結として行為を受けたものが)死ぬあるいは死なないという結果事象が生起した, と捉える話者の捉え方が表現されている。「落ちて壊れる/壊れない」であれば, 当該文脈の中で落ちるといふ移動事象の生起を背景として(その自然の帰結として移動を経たものが)壊れるあるいは壊れないという結果事象が生起した, と捉える話者の捉え方が表現されている。因果動詞句連続構文が表す意味—先行動詞句の意味と後続動詞句の意味を足した合計以上の意味—は, そのような言語使用者の解釈を常に伴う語用論レベルの意味であり, 「限界相」などのいわゆる命題レベルの意味—動詞を核とする節が表す述語タイプ(語彙アスペクトを含む事象の種類)および項/参与者タイプ(意味的/文法的役割の種類)とそれらのタイプに適合する語彙項目が表す具体的な語彙の意味から構成される意味(Givón 1984: 86)—とは次の異なる意味である。

4. TNC を使った談話分析

これまで実際の談話資料から *khâa-taay* 構文を多数集めて分析した先行研究はなかった。本稿では TNC から集めた *khâa-taay* 構文の実際の使用例をもとに *khâa-taay* 事象の特徴を探る。タイ語の動詞はその意味によってどのような意味役割の項を取り得るのか、いくつの項を取り得るのかが決まっている。しかし先に述べたとおり、これらの項は必須項ではなく、実際、項を伴わないことが多くある。さらに、主題は何かといった情報構造を中心として文章が構成されていく傾向が強い。そこで、*khâa* 事象、*taay* 事象、*khâa-taay* 事象の中心的な事象参与者一死に至らしめるものと死ぬもの一を表す項名詞句だけに注目するのではなく、付属語句/副詞表現や節の構造にも注目し、さらに談話文脈から言語使用者の発話意図や注目している内容の違いも読み取りながら、各構文が表す事象概念の特徴について一般化を試みた。

まず TNC の検索機能を利用して *khâa* ‘殺す’, *taay* ‘死ぬ’, *khâa-taay* ‘殺して死ぬ’ を含む談話の断片をそれぞれ 100 ずつ抽出した。TNC に含まれている *khâa*, *taay*, *khâa-taay* の総数もそれぞれ調べた。最も多かったのが *taay* で 9732, 次に *khâa* で 3030 あった。ただしこれらの数字には 157 の *khâa-taay* も含まれている。*khâa-taay* は 157 しかなかった。抽出した 100 ずつの用例から物理フレームが関与する具体的な意味用法だけを拾い集め、比喩表現や感嘆用法などの抽象的意味用法およびタイプミスを含む不適切な用法などを除外した結果、*khâa* は 94 の用例、*taay* は 88 の用例、*khâa-taay* は 96 の用例が残った。それらの用例を統語構造によって大まかに分類した結果を表 1 にまとめた。

表 1: TNC から抽出した用例の形式面の分類

「 <i>khâa</i> ‘殺す’」 100-不適切な用例 6= 94 (TNC 内の総数 3030)		<i>khâa</i> (<i>khâa hây taay</i> を含む)	59
		(V +) <i>khâa</i> + V (11); V + <i>khâa</i> (+ V) (16)	27
	使役標識 <i>hây</i>	<i>hây khâa</i>	1
	受動標識 <i>thùuk / doon</i>	{ <i>thùuk / doon</i> } <i>khâa</i> (5); <i>thùuk khâa</i> + V (2)	7
「 <i>taay</i> ‘死ぬ’」 100-不適切な用例 12= 88 (TNC 内の総数 9732)		<i>taay</i>	51
	否定辞 <i>mây</i>	<i>mây taay</i>	4
		<i>taay</i> + V (+V) (13); (V +) V + <i>taay</i> (17)	30
	使役標識 <i>hây</i>	(V +) <i>hây taay</i>	3
「 <i>khâa-taay</i> ‘殺して死ぬ’」 100-不適切な用例 4= 96 (TNC 内の総数 157)		<i>khâa taay</i>	10
	否定辞 <i>mây</i>	<i>khâa mây taay</i>	2
	使役標識 <i>hây</i>	<i>hây khâa taay</i>	4
	受動標識 <i>thùuk / doon</i>	{ <i>thùuk / doon</i> } (V+) <i>khâa taay</i>	80

表 1 から次のことが読み取れる。第一に、*khâa* も *taay* も、*khâa-taay* 以外の動詞句連続構文の形をとり得る。例えば、「*khâa*+後続動詞句」という形式には「殺す→食べる(食べるために殺す)、殺す→売る(売するために殺す)、殺す→絶やす(絶やすために殺す)」や「殺す=捨てる(殺し捨てる)、殺す=斬る(殺し斬る)」などが含まれ、「先行動詞句+*khâa*」という形式には「薬をかける→殺す(殺すために薬をかける)、煮る→殺す(殺すために煮る)」や「禁じる=殺す(殺すのを禁じる)、必要がある=殺す(殺す必要がある)」などが含まれていた。また、「*taay*+後続動詞句」という形式には「死ぬ=消え失せる(死に消え失せる)」などが含まれ、「先行動詞句+*taay*」という形式には「撃つ→死ぬ(撃って死ぬ)、突き刺す→死ぬ(突き刺して死ぬ)、首を吊る→死ぬ(首を吊って死ぬ)、乳を我慢する→死ぬ(乳を我慢して死ぬ)、結核になる→死ぬ(結核になって死ぬ)、喉に詰まる→死ぬ(喉に詰まって死ぬ)、萎れる→死ぬ(萎れて死ぬ)、倒れる→死ぬ(倒れて死ぬ)、のたうつ→死ぬ(のたうって死ぬ)」や「容認する=死ぬ(死ぬのを容認する)、恐れる=死ぬ(死ぬのを恐れる)、勇気がある=死ぬ(死ぬ勇気がある)」などが含まれていた。ただし、そうした動詞句連続構文の用例は単独動詞句の用例に比べてそれほど多くなく、*khâa* では全 94 例中 29 例だけ、*taay* でも全 88 例中 30 例だけだった。つまりどちらも 3 割程度しか動詞句連続構文の形はなかった。*khâa-taay* の用例数もコーパス全体で 157 例しかない。「殺す」事象や「死ぬ」事象は、単独動詞句によって単純構造の事象として表現されることが多いといえる。

第二に、予想に反して、否定形が少なかった。*khâa* の否定形 *mây khâa* ‘殺さない’ は 1 つもなく、*taay* の否定形 *mây taay* ‘死なない’ は 4 例だけ、*khâa-taay* の否定形 *khâa mây taay* ‘殺して死なない’ も 2 例しかなかった。しかし注目すべきは、*mây khâa* ‘殺さない’ は 1 例もなかったのに対し、*khâa mây taay* ‘殺して死なない’ は 2 例あったという事実である。

第三に、使役標識 *hây* との共起形はいずれも数例しか見つからなかった。*hây khâa* ‘殺させる’ は 1 例、*hây taay* ‘死なせる’ は 3 例、*hây khâa-taay* ‘殺して死ぬ’ようにさせる’ は 4 例だけだった。

第四に、最も意外だったことだが、*khâa-taay* が受動標識 *thùuk* と共起した *thùuk khâa-taay* ‘殺して死ぬ’という事態を被る’ という形が非常に多かった。分析対象とした *khâa-taay* の全用例数 96 の実に約 8 割にあたる 80 の用例が受動形

だった。その一方で, *khâa* の受動形 *thùuk khâa* あるいは *doon khâa* ‘殺される’ は 5 例しかなかった。

補足であるが, *khâa* を含む慣用表現と *taay* を含む慣用表現がいくつかあった。慣用表現の中の *khâa* や *taay* は「殺す」や「死ぬ」という本来の意味を表さない。例えば, *khiit khâa* ‘線を引いて消す’ の *khâa* は「消去する」という意味を表し, *pâap taay* ‘静止画’ の *taay* は「動かない, 静止した」という意味を表す。また, *taay* は感嘆表現 (*?óoy taay, taay léew, taay laay* ‘あら大変, まあいやだ, おしまいだ’) や程度を強調する表現 (*~cà? taay (pay), ~thêep taay* ‘死にそうなくらいひどく~’) にも使われる。一方で, *khâa-taay* を含む慣用表現はなかった。*khâa-taay* には「殺して死ぬ」という本来の物理的意味を表す用法しかないようである。

以上が, 集めた用例を統語構造の観点から分類することによって見えてきた *khâa* 構文, *taay* 構文, *khâa-taay* 構文の大きな特徴である。下の第 4.1~4.2 節で, それぞれの構文が表す事象にはどのような特徴があるのか, 詳しく検討していきたい。

本稿では, 意味フレームの一種である「因果連鎖」(Croft 1991: 169), より具体的には, 動詞によって表される「事象の理想的概念構造」(Croft 1998: 47)という分析概念を使って *khâa-taay* 事象の特徴を探る。「意味フレーム」とは Fillmore (1982: 111)の定義によれば「関連性を持つある概念群を理解するために必要なそれらの概念を包含する全体的な知識構造, 知識体系」のことである。様々な種類の意味フレームが考えられるが, *khâa* 構文, *taay* 構文, *khâa-taay* 構文が表す物理的事象の違いを分析するためには, 力学的な事象構造である因果連鎖という概念が分析の枠組みとして必要である。因果連鎖の概念をより具体化した「事象の理想的概念構造」を図 1 に示す。事象の理想的概念構造は 2 種類の事象参与者「A 使役者 (変化を起こすもの), B 受動者 (変化を経るもの)」が関与する 3 種類の副事象「使役(...), 変化(==), 状態(---)」によって構成されていることがわかる。



図 1: 2 種類の事象参与者と 3 種類の副事象から成る因果連鎖 (動詞によって表される事象の理想的概念構造)

この理想的概念構造(ICM)が *khâa* 事象, *taay* 事象, *khâa-taay* 事象の各事象の因果連鎖を理解するための物理フレームとして機能する。さらに, この因果連鎖のどの部分に焦点が当てられ前景化されているのかが各事象で異なるであろう。このような焦点化/前景化にかかわる認知プロセスは「プロファイル(profile)」(Langacker 1987: 183)あるいは「注目枠(windowing of attention)」(Talmy 2000a: 257-309)と呼ばれる。ただし注意すべきは, 本稿の分析では, 節の中の中核的な言語形式 (動詞とその項から成る項構造) によって表される事象の範囲を問題とするのではなく, 付属語句/副詞表現などの周辺の言語形式や受動形などの節構造を考慮し, さらには文脈全体を見渡した上で, 因果連鎖のどの部分に局所的な焦点が当たっているのかを考察するという点である。(下の図 2~4.2 では, 前者の「項構造から同定される焦点化された描写対象の範囲」は星型記号****によって表され, 後者の「談話文脈から同定される局所的な前景化の範囲」は山型記号^^^によって表されている。)

4.1. *khâa* 事象と *taay* 事象

図 2, 図 3, 図 4.1, 4.2 は, それぞれ, TNC を使った談話分析によって見出された *khâa* 事象, *taay* 事象, *khâa-taay* 事象の特徴を図 1 の物理フレームに沿って図式化したものである。星型記号が連なった線(****)はそれぞれの構文の項構造の描写対象の範囲を示し, 山型記号が連なった線(^^^)はその描写対象の範囲内でのさらなる局所的な前景化の範囲を示している。「A」は「死に至らしめるもの(effector)」である事象参与者, 「B」は「死ぬもの(animate patient)」である事象参与者を表している。

khâa 事象の特徴は, 図 2 に示すように, 描写対象が「殺す行為, 死ぬ変化, 死んだ状態」という 3 つの副事象にわたっていること, そして「殺す行為」が特に前景化されていることである。一方 *taay* 事象の特徴は, 図 3 に示すように, 描写対象が「死ぬ変化, 死んだ状態」という 2 つの副事象に限定されていることである。

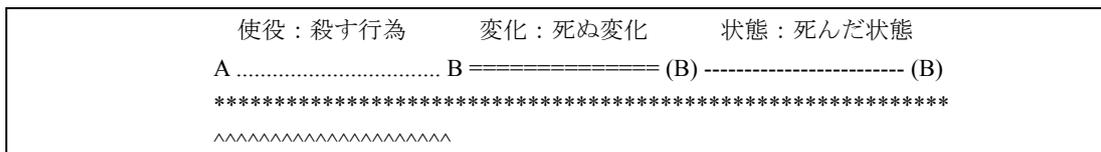


図 2: *khâa* ‘殺す’ 事象の因果連鎖の形と副事象「使役」の前景化 (e.g. (14))



図 3 : taay ‘死ぬ’ 事象の因果連鎖の形と副事象「変化+状態」の前景化 (e.g. (15))

(14) yaay phayaayaam khâa khâw
 祖母 努める 殺す 彼
 おばあさんは彼を殺そうと努力した [ACHM010]

(15) taay pay léew
死ぬ 行く 完了
 死んでしまった [PRNV011]

(14)は TNC から拾った khâa 構文の例, (15)は TNC から拾った taay 構文の例である。(14)では khâa が動作主の意志を表す動詞 phayaayaam ‘努力する’ と共起していることに注目されたい。その他, khâa 構文では(16)のように殺す行為を修飾する副詞表現 (dooy thooramaan ‘虐待によって (殺す)’) を含むことはあったが, 死んだ結果状態を修飾する副詞表現を含むことはなかった。これらのことから, khâa 事象では「殺す行為」が特に前景化されていることが伺える。

(16) khâa dooy thooramaan rûuu dooy kratham hòot ráay
殺す ~により 虐待する あるいは ~により 行う 残酷だ
 虐待したり残酷なことをしたりして殺す [ACSS082]

(17) pen kaan taay yàaŋ mii kiát
 繫辞 名詞化 死ぬ ~のように ある 名誉
 名誉ある死に方である [NACSS036]

一方 taay 構文では, (17)のように死んだ結果状態を修飾する副詞表現 (yàaŋ mii kiát ‘誉れあるように (死ぬ)’) を含む例はあったが, 殺す行為を修飾する副詞表現を含む例はなく, (14)のような意志を表す動詞を含む例もなかった。

(18) taay phrɔʔ thùuk khâa
 死ぬ ~の理由で 受動 殺す
 (寿命による死ではなく) 殺される (「殺す」という事態を被る) ことによって死ぬ [NACHM067]

(18)は khâa 構文の受動形の例である。khâa 構文が受動形になるということは, khâa 事象は他動性が高いことを意味する。言い換えれば, khâa 事象では殺すという他動性の高い行為が前景化されているということである。一方, 死ぬという他動性の低い変化と状態を表す taay 構文に受動形の例はなかった。

4.2. khâa-taay 事象

図 4.1 と図 4.2 は TNC を使った談話分析によって見出された khâa-taay 事象の特徴を図式化したものである。khâa-taay 事象の特徴は, 「殺す行為, 死ぬ変化, 死んだ状態」という使役連鎖を構成する 3 つの副事象のすべてが描写対象であること, また, 図 4.1 のように「死ぬ変化, 死んだ状態」(taay の項構造の描写対象範囲と重なる部分) が前景化される場合 (例(20)) と, 図 4.2 のように「殺す行為, 死ぬ変化, 死んだ状態」のすべて (khâa の項構造の描写対象範囲と重なる部分) が前景化される場合 (例(21)) があることである。

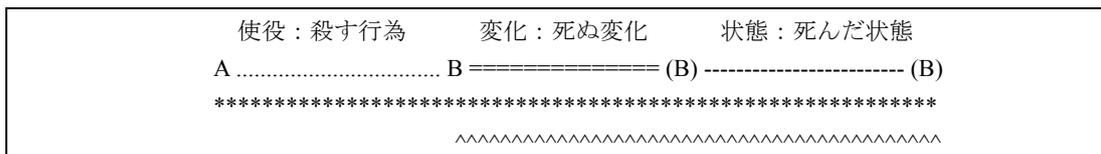


図 4.1 : khâa-taay ‘殺す-死ぬ’ 事象の因果連鎖の形と副事象「変化+状態」の前景化 (e.g. (19))

- (24) khâa taay thánj khrôop khrua
 殺す 死ぬ 家中すべて
 家中すべて殺して死ぬ [ACSS082]

さらに khâa-taay 構文の場合は、受動形も(25)のように殺す行為を修飾する副詞表現 (dooy ceetanaa ‘故意に(殺す)’)を含む例と、(26)のように死んだ結果状態を修飾する副詞表現 (yók khrua ‘家ごと全部(死ぬ)’)を含む例の両方があった。

- (25) phûu ?aw prakan chiiwít thùuk phûu ráp prayòok khâa taay dooy ceetanaa
 生命保険加入者 受動 受益者 殺す 死ぬ 故意に
 生命保険加入者が「受益者(保険金受取人)が故意に殺して死ぬ」という事態を被る [ACC069]⁹
- (26) phôo mêt kháw thùuk khâa taay yók khrua
 父 母 彼 受動 殺す 死ぬ 家ごと全部
 彼の両親は「家ごと殺して死ぬ」という事態を被った [PRNV018]

(22)のような khâa 構文の受動形 thùuk khâa は殺すという行為事象を被ることを意味し、死ぬという結果事象には焦点が当たっていない。一方(21), (25), (26)のような khâa-taay 構文の受動形 thùuk khâa-taay は殺す行為事象と死ぬ結果事象の両者をまとめて1つの事象とみなし、その事象を被ることを意味する。そのため(25)のように殺す行為事象を特に取り上げて修飾することもできれば、(26)のように死ぬ結果事象を特に取り上げて修飾することもできる。前者(25)の場合に殺す行為だけに焦点が当たっていると考えすることはできない。なぜなら taay ‘死ぬ’ という死んだ結果状態を明示的に表す動詞が使われているからである。殺す行為だけに焦点を当てたいのであれば taay を使う必要はない。むしろ使ってはいけない。taay を添えた khâa-taay の形になっているということは、やはり死んだ結果状態も殺す行為とともに前景化されていると考えるべきだろう。

5. まとめ

khâa-taay 事象 (図 4.1, 図 4.2) を khâa 事象 (図 2) および taay 事象 (図 3) と比べると、khâa-taay 事象の特徴が明らかになる。khâa-taay 事象は、項構造から同定される因果連鎖上の描写対象の範囲という点において taay 事象と異なる特徴を持ち、談話文脈から同定される描写対象内の局所的な前景化の範囲という点において khâa 事象と異なる特徴を持っている。

TNC を使った談話分析によって、khâa-taay 構文は「殺す行為の生起を背景として、自然の成り行きとしての死ぬという結果、あるいは同じく自然の成り行きとしての死なないという結果を前景化して表現する」という高橋(2010)の考えが間違ったものではなかったことを確認することができた。しかし今回の大規模コーパス調査で明らかになった最も重要な点は、そのような「殺す行為事象の生起を背景にした死ぬあるいは死なないという結果事象」に焦点を当てる khâa-taay 構文の使い方は、khâa-taay 構文の1つの使い方ではあるが、実際にはあまり使用されていない使い方であり、最も多い khâa-taay 構文の使い方は、殺す行為事象と死ぬ結果事象のどちらにも焦点を当てる thùuk khâa-taay という受動形の使い方であるという点である。

<謝辞>

日本認知言語学会第 11 回全国大会 (2010 年 9 月 11-12 日, 立教大学) での口頭発表の後, 古賀裕章氏, 上原聡氏, 藤井聖子氏, 秋山淳氏から貴重な助言と建設的な批評や示唆をいただいた。心より感謝申し上げたい。しかし筆者の力量不足により, いただいた助言や批評/示唆を十分に本稿に反映させることができず, また, 中身の濃い説得力のある議論を展開することもできなかった。今後, 談話分析の質を高め, 考察を深めていきたい。本稿の誤りや不備はすべて筆者の責任であることは言うまでもない。

<注>

1. 各例文の日本語訳末尾の記号は用例の引用先である Thai National Corpus (TNC) の ID 番号である。TNC は 2009 年にインターネット上 [<http://www.arts.chula.ac.th/tnc2/>] に公開された (目標収録単語数は 8,000,000 語だが, 未だ達せず)。TNC の誕生によって, 実際の用例を多数集めてボトムアップ式にタイ語分析を行うことが容易になった。下の表のとおり, TNC は British National Corpus (BNC) に倣って設計されている (Aroonmanakun 2007)。

Domain	情報（学術，金融，外交，娯楽など）75%，創作（文芸）25%。
Medium	書籍 60%，定期刊行物（雑誌，新聞）25%，その他の印刷物（ちらし，広告）5-10%，出版されていない個人の筆記（手紙，日記，作文，備忘録）5-10%，インターネット上の記述 0-5%。選んだ個々の内容からそれぞれ 40,000 語未満を抽出。
Time	1998 年～2007 年に書かれたもの 90-100%，1988 年～1997 年に書かれたもの 0-10%。ただし伝承物語などについては，1988 年～2007 年に再版されたものだけに限り，1988 年より前に書かれたものも含む 0-5%。

2. Hopper (1991: 412)は「事象(Event)」の典型を「語りという発話行為の中で生まれ，語り手の視点や発話意図に応じて変容を受ける技巧的，修辭的（すなわち個人的，主観的）な構造物」とする。
3. (5)-(8)のような2つの動詞句から成る基本的動詞句連続構文の統語構造は，Rappaport Hovav & Levin (2001)の分類に従うと，次のような3タイプに分類できる。(a) transitive-based, object-oriented タイプ：先行動詞は目的語をとり，後続動詞は先行動詞の目的語の述語になる（e.g. kháw cháw n̄n mòt ‘彼はお金を使って（お金が）尽きる’）。(b) transitive-based, subject-oriented タイプ：先行動詞は目的語をとり，後続動詞は先行動詞の主語の述語になる（e.g. kháw kin lāw maw ‘彼は酒を飲んで酔う’）。(c) intransitive-based, subject-oriented タイプ：先行動詞は目的語をとらず，後続動詞は先行動詞の主語の述語になる（e.g. ceekan tòk tèek ‘花瓶は落ちて割れる’）。
4. 中国語動詞の意味分析にもこのような考えが見られる(e.g. 荒川 1982: 81-82, Tai 1984). Tai (1984: 291)によれば，中国語の動詞 sha ‘殺す’ は死ぬという結果事象の実現を必ずしも含意しないため Zhangsan sha-le Lisi liangci, Lisi dou mei si ‘張三是李四を2回殺したが（殺そうと試みたが），李四是死ななかった’ と言え，一方，複合動詞 sha-si ‘殺して死ぬ’ は死ぬという結果事象の実現を意味するため *Zhangsan sha-si-le Lisi liangci, Lisi dou mei si ‘張三是李四を2回殺して死んだが，李四是死ななかった’ とは言えないという。いずれにせよ，複合動詞 sha-si ‘殺して死ぬ’ は2つの動詞が形態論レベルで結合した形式であり，語彙の意味論の枠組みで分析できるが(e.g. Talmy 2000: 272-277, Thompson 1973), 本稿の分析対象であるタイ語の khâa-taay 構文は複合動詞ではなく動詞句連続構文であり，語彙の意味論の枠組みで分析するには相応しくない形式であると筆者は考える。
5. 上原・Thepkanjana (2009: 369-370)は，Talmy (2000b)と異なり，「動作主の意図」は結果構文における主動詞が通常の場合で使用される際に語用論的に連想される典型的な読みの一部に過ぎないと考える。したがって，主動詞の意味内容に含まれる実現事態の程度性を，「動作主の意図」がどの程度実現されるかという尺度によってではなく，「主動詞に含意されるその動作の結果として起こり得る事態そのものの生起可能性」がどの程度あるかという尺度によって規定し，③の主動詞（実現示唆動詞）を「結果示唆動詞」と言い換え，④の主動詞（実現完了動詞）を「結果含意動詞」と言い換えている。
6. 英語では①（と②）が本来的結果構文であり，③（と④）は派生であると考えられるようだが，タイ語の動詞句連続構文でも同様の区別は可能だろうか。この問いに答えるためには，大局的に英語の文法体系とタイ語の文法体系を照らし合わせ，形式の類似性の観点からではなく意味機能の類似性の観点から両者を比較対照しなければならない。柴谷(2000: 45)が指摘するように「他の言語で見られる文法範疇がその言語に存在するのかどうかは当該言語において独自に検証されなければならない」。結果構文という文法概念自体が柴谷(2000: 12)の言う「類型論的にバイアスのかかったもの」である可能性もある。
7. 直接的因果関係を表す(5)タイプの動詞句連続構文には，先行研究が分析対象とする「扉を蹴って（扉が）開く，服を洗って（服が）きれいになる，布を破って（布が）裂ける，虫を殺して（虫が）死ぬ」などの構文の他，「お金を使って（お金が）尽きる，財布を落として（財布が）なくなる，話を聴いて（話を）理解する，働いて三年になる，酒を飲んで酔う，落ちて割れる」などの構文も含まれる(Takahashi 2007)。それらのどれが典型でどれが派生かを定めることはできない。さらに言えば，例えば「扉を蹴って（扉が）開く」と「扉を蹴って（扉が）開かない」あるいは「落ちて割れる」と「落ちて割れない」のどちらが典型でどちらが派生かも定めることができない。どれも「何かを背景とした合理的な帰結」という話者の捉え方を表している点で同等である。
8. 木村(2000: 23-25)は中国語の受影文「X 被 YV」（V：動作/作用を表す述語，X：動作/作用の対象，Y：動作/作用の主体）について次のように述べる。受影文の述語成分には，Xが動作/作用の結果として被る具体的な影響を明示する表現あるいはそれを強く含意する表現が要求される。したがって，受影文に最適の述語は動補構造 VR (=動詞 V+結果補語 R)（複合動詞）である（e.g. 李四被張三殺死）。「X 被 YVR」という形式は「XがYにVさせた結果，XがRの状況になる」という意味を表す。結果を表す補語成分を伴わない動詞は，未然の事態を表す受影文には適応し難く（e.g. *李四会被張三殺），既然の事態を表す受影文にしか適応し得ない（e.g. 李四被張三殺了）。しかしタイ語では，(22)のような他動詞 khâa ‘殺す’ 単独の受動形「X thùuk Y khâa ‘XはYに殺される（Xは「Yが殺す」という事態を被る）」も，(21)のような因果動詞句連続構文 khâa-taay ‘殺して死ぬ’ の受動形「X thùuk Y khâa taay ‘Xは「Yが殺して死ぬ」という事態を被る」も，未然/既然を問わず成立する。
9. (26)では動作主の意志性を表す副詞表現が khâa-taay の後ろに生起している。このことから，khâa-taay 構文の受動形「thùuk khâa taay（動作主の意志性を表す副詞表現）」の内部構造は，「[thùuk khâa] *[taay（動作主の意志性を表す副詞表現）] ‘[殺されて] *[(意志的に) 死んだ]’ という構造ではなく，「thùuk [khâa-taay（動作主の意志性を表す副詞表現）] ‘[(意志的に) 殺して死ぬ]という事態を被った’

という構造になっていることがわかる。

<参考文献>

- 荒川清秀. 1982. 「中国語の語彙」 森岡健二・他（編）『講座日本語学 12：外国語との対照Ⅲ』, 62-84. 明治書院.
- Aroonmanakun, Wirote. 2007. Creating the Thai National Corpus. *MANUSYA: Journal of Humanities, Special Issue No.13: Trends in Thai Linguistics*, 4-17.
- Bruce, Les. 1988. Serialization: From syntax to lexicon. *Studies in Languages* 12.1, 19-49.
- Croft, William. 1991. *Syntactic Categories and Grammatical Relations: The Cognitive Organization of Information*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Croft, William. 1998. Event structures in argument linking. In Butt, Miriam and Wilhelm Geuder (eds.) *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors*, 21-63. Stanford: CSLI Publications.
- Durie, Mark. 1997. Grammatical structures in verb serialization. In Alsina, Alex, Joan Bresnan, and Peter Sells (eds.) *Complex Predicates*, 289-354. Stanford: CSLI Publications.
- Enfield, N. J. 2002. Cultural logic and syntactic productivity: Associated Posture constructions in Lao. In Enfield, N. J. (ed.) *Ethnosyntax: Explorations in Grammar and Culture*, 231-258. Oxford: Oxford University Press.
- Fillmore, Charles J. 1982. Frame semantics. In The Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*, 111-137. Seoul: Hanshin.
- Givón, Talmy. 1984. *Syntax: A Functional-Typological Introduction, Volume 1*. Amsterdam: John Benjamins.
- Hopper, Paul J. 1991. Dispersed verbal predicates in vernacular written narrative. *Proceedings of the 17th Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society, February 15-18, 1991 (BLS17)*, 402-413.
- 木村秀樹. 2000. 「中国語ヴォイスの構造化とカテゴリ化」『中国語学』247, 19-39.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, Volume 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- 峰岸真琴. 2007. 「孤立語の他動性と随意性」角田三枝・他（編）『他動性の通言語的研究』, 205-216. くろしお出版.
- Noss, Richard B. 1964. *Thai: Reference Grammar*. Washington, D.C.: Foreign Service institute.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin. 2001. An event structure account of English resultatives. *Language* 77-4: 766-797
- 坂本比奈子. 1985. 「タイ語の動詞の下位分類について」『アジア・アフリカ言語文化研究』30, 177-192.
- 柴谷方良. 2000. 「言語類型論と対照研究」生越直樹（編）『対照言語学』, 11-48. 東京大学出版会.
- Tai, James H-Y. 1984. Verbs and times in Chinese: Vendler's four categories. In Testen, David et al. (eds.) *Papers from the Parasession on Lexical Semantics (CLS)*, 289-296. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Takahashi, Kiyoko. 2007. Accomplishment constructions in Thai: Diverse cause-effect relationships. In Iwasaki, Shoichi et al. (eds.) *Papers from the 13th Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society 2003*, 263-277. Canberra: Pacific Linguistics.
- Takahashi, Kiyoko. 2009. Basic serial verb constructions. *Journal of the Southeast Asian Linguistics Society*, Vol.1, 215-229.
- 高橋清子. 2010. 「タイ語における他動性と使役性」西光義弘&プラシヤント・パルデシ（編）『自動詞・他動詞の対照』, 91-142. くろしお出版.
- Talmy, Leonard. 2000a. *Toward a Cognitive Semantics, Volume 1: Concept Structuring Systems*. Cambridge: MIT Press.
- Talmy, Leonard. 2000b. *Toward a Cognitive Semantics, Volume 2: Typology and Process in Concept Structuring*. Cambridge: MIT Press.
- Thepkanjana, Kingkarn. 2008. Verb serialization as a means of expressing complex events in Thai. In Lewandowska-Tomaszczyk, Barbara (ed.) *Asymmetric Events*, 103-120. Amsterdam: John Benjamins.
- Thompson, Sandra Annear. 1973. Resultative verb compounds in Mandarin Chinese: A case for lexical rules. *Language* 49.2, 361-379.
- 上原聡・Kingkarn Thepkanjana. 2009. 「タイ語における結果構文」小野尚之（編）『結果構文のタイポロジー』, 365-406. ひつじ書房.